

有明海の歴史と佐賀の将来

2018年11月7日

久留米大学教授

大矢野 栄次

0. 歴史的事実について

- 神武天皇(紀元前660年2月11日)
 - ⇒ 徐福来日(紀元前3世紀頃)
 - ⇒ 邪馬台国卑弥呼(~247or248年)
 - ⇒ 神功皇后(卑弥呼と同時代人説?)

↓ ↓ ↓

- 徐福来日(紀元前3世紀頃)
 - ⇒ 邪馬台国卑弥呼(~247or248年)
 - ⇒ 神武天皇(300年前後)
 - ⇒ 神功皇后(卑弥呼と同時代人説?)

日本の人口推計

社会工学研究所

McEvedy
& Jones

鬼頭宏

Biraben

Farris

西暦	1974年	1978年	1996年	1993-2005年	2006-2009年
紀元前 400年	神武天皇はこれ以前	30,000		100,000	
300年				150,000	
200年	徐福の時代	100,000		200,000	
元年		300,000		300,000	
200年		700,000	594,900	500,000	
300年	邪馬台国の時代			600,000	
400年		1,500,000		1,500,000	
500年				2,000,000	
600年		3,000,000		4,000,000	
700年	5,230,000			5,000,000	
725年			4,512,200		
730年				5,600,000	
750年					5,800,000— 6,400,000

徐福の時代の日本の人口は10万人～20万人

1.紀元前2世紀から3世紀邪馬台国

- 縄文時代から弥生時代への移行期に徐福は日本に来た。 ⇒ 有明海の歴史
- 魏志倭人伝による30余国分立の原因は、徐福上陸後に実現した豊かさとその格差が発生したことにある。 ⇒ 北部九州の歴史
- 言葉と文化の統合と一族の離散が繰り返された結果として、3世紀の邪馬台国の時代を迎え → 統一と離合の後、卑弥呼が登場した。
- 卑弥呼亡きあと、国は乱れて、壹代=豊与が登場して再び邪馬台国連合が成立する。

神武天皇の登場

- このとき日本の宗教の儀式としての原形が生まれた。⇒ (徐福+山の文化)神話の創造と体験
- 九州の山の文化(山幸彦)と対馬の海の文化(海神)の交流、排除される有明海文化圏(海幸彦;徐福の文化)⇒ 彦火火出見尊(山幸彦)と豊玉姫の子。
- ⇒ 『古事記』天津日高日子波限建鵜草葺不合命(あまつひこひこなぎさたけうがやふきあえずのみこと)、『日本書紀』彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊(ひこなぎさたけうがやふきあえずのみこと)と表記。⇒ 神武天皇の登場

2. 海流と古代史

決まった向きに流れる海の水を「海流」という。
暖かい海流は「暖流」、冷たい海流を「寒流」。

①徐福の来た途

- 一回目 伊万里へ
- 二回目 有明海の湾奥部へ
- (一部は、和歌山へ)

②魏志倭人伝と邪馬台国

魏志倭人伝をミスプリとする邪馬台国近畿説

徐福

- 中国の秦朝(紀元前3世紀頃)の方士。
- 斉国の琅邪郡(ろうや;山東省臨沂市;りんぎし)出身
- 司馬遷『史記』卷百十八「淮南衡山列伝」
- 秦の始皇帝に、「東方の三神山に長生不老(不老不死)の靈薬がある」と具申し、始皇帝の命を受け、3,000人の童男童女と百工(多くの技術者)を従え、五穀の種を持って、東方に船出し、「平原広沢(広い平野と湿地)」を得て、王となり戻らなかったとの記述がある。

徐福の出生地

- 徐福の出生地は、河北省滄州市千童鎮の周辺。
- 中国には、紀元前209年、徐福は秦の始皇帝の命を受け、饒安邑に城を築いて童男童女と技術者を集めた。あるいは訓練にはげみ、あるいは造船をおこなった後、無隸川を経て黄河の河口から日本へ向け出港した。このときから人々は饒安邑を千童城と呼び始めた。

出航地と航路

- 現在の山東省から浙江省にかけて諸説ある。
- 河北省秦皇島、浙江省寧波市慈溪市説もある。
- 徐福は渤海と黄海に突き出た山東省に居住していた。
- 途中、韓国済州道西歸浦市(ソギポ市)や朝鮮半島の西岸に立寄り、日本に辿り着いた説がある。
- 日本には、下見の伊万里説と本番の有明海説の二回の訪問説がある。

神話から歴史に代わった徐福

- 近年になって江蘇省に徐福の子孫が住んでいることが確認された。
- 日本各地では、徐福についての伝承がいたるところに残っている。
- 佐賀県で、神社などの伝承で徐福の足跡が残っている地には、以下のような場所が挙げられる。
- 伊万里、黒髪山、武雄温泉、蓬莱山、竜王崎、有明海、そして金立山。
- 金立山は、徐福がめざした霊薬のある三神山であるという伝承がしっかりと遺されている。
- 金立山の西方、脊振山と天山の山峡にあるのが、古湯温泉。この近くには、弥生時代、稲作文化が伝承した原点ともいえる吉野ヶ里遺跡がある。

3. 徐福の時代

- 紀元前200年頃(2200年前), 徐福は不老不死(硫化水銀)の薬草を求めて来日。
- 司馬遷(BC145~86)『史記』では徐福は齊の国(始皇帝によって滅ぼされた国、山東省)の方士(ほうし。呪術師, 医薬, 天文, 他学問に精通)である。
- 秦の始皇帝に「東方海中の三神山にある不老不死の薬を求めてきましょう」と進言してBC210年から2回目の航海で九州の北西部有明海に上陸し, この地で王となった。
- 佐賀県の竜王崎、金立山, 浮盃, 徐福の伝承地が多数残っている。吉野ヶ里遺跡からは当時の中国の人たちの特徴をもつ人骨が発見されている。

徐福の1回目の航海

- BC221年、全国を統一した秦の始皇帝全国は領内巡行して、東国へBC219年、徐福と出会う。
- 齊の国の徐市(徐福)は「東方海中に蓬萊・方丈・瀛洲(えいしゅう)という三神山があり仙人が住んでいる。そこへ行って不老不死の薬を求めて来ましょう」と申し出た。
- BC210年、徐福は若い男女500人とともに大船20隻で出航した。数日の航海の後、伊万里不老山に仙薬を求めた。
- 伊万里市「波多津」。波多=秦, 津=港
- 薬草を見つけることができなかった一行は南下し黒髪山に登山。標高516mの黒髪山頂上天童の岩周辺で仙薬を探し求めた。
- 黒髪山の南東にある山内町に犬走という地区の天満宮徐福が祀られている。徐福石像の土台の石には「除副社」と彫られている。

BC210年，徐福ら出航

- BC210年，徐福ら出航。数年経っても仙薬を手に入れることができず。徐福偽りの報告。「出航したものの大サメに苦しめられ，行き着くことができませんでした。」「私は海上で海神と出会いました。海神に不老不死の仙薬を探していると話すと，『主君の礼が足りないから手に入れることはできない』と言われました。
- そのあと私は海神とともに蓬萊山にある宮殿に行きました。そこで，海神に仙薬を手に入れるにはどうしたらいいかと尋ねると，海神は『少年少女と道具や技術を献上しなさい』と言われました。」

古湯と徐福

- 金立山の西にある富士町古湯温泉は徐福が見つけた温泉と言われている。
- 「いで湯のいわれ書き」という古文書によると、人皇七代孝霊天皇の72年、中国の「徐福」が、奏の始皇帝の命を受け、不老長寿の霊薬を求めて、佐賀郡諸富町寺井津浮盃に上陸し、金立山に辿り着き、北山の翁として、浮世を忘れて暮らしているうち、

「朝廷」は「丹土」や「水銀」の獲得に 心血を注いだ

- 水銀鉱脈に水銀玉が露出している場合と「水銀」の硫化化合物である辰砂(丹土)から精錬し生産する場合がある。
- 辰砂から精錬する方法は辰砂を陶器炉で加熱し水銀蒸気と亜硫酸ガスを生じさせ、水銀蒸気を冷却、凝縮させて「水銀」を精錬する。
- 古代、「金鍍金」(金メッキ)や「金」や「銀」を精錬するには「水銀」が重要な役割を果たした。

神武天皇が丹生都比売命に会う

- 「神武天皇が丹生の川上にのぼって天神地祇を祀られた際、稚日女尊は丹生都比売命と名を変えられて祀られた。故に丹生都比売命は稚日女尊と同神なので天照大神の妹神である」
- 「丹生の神」は、本来、採鉱や精錬の神

丹生

- “丹”の生産やその産地を“丹生”
- 丹の生産に携わる者達が「丹生族」、丹生部
- 土師部、壬生部、丹治比部、埴生部は丹生部民とも関連する部族である。
- 「古代ヤマトでいう丹とは、硫化水銀(朱)、四塩化鉛(丹)、褐鉄鉱、赤鉄鉱、酸化鉄(赭)をいい、その生産・精錬を主に生業とする部族を丹生族といった」

天武朝以降

- 丹生族を統轄したのは息長丹生真人
- 『新撰姓氏録』右京皇別の二番目に記載されている人物
- 最上位左京皇別筆頭、息長真人と同祖
- 支配下には丹生部だけでなく、土師部・壬生部・丹治比部・埴生部などをも差配していたのではないかと思われる。

Ⅲ. 神武天皇

- 山幸彦(火々出見命)と豊玉姫 → 対馬島からの影響 → 鵜萱葺不合命と玉依姫 → 博多湾上陸 → 宝満山山信仰 → 大城山 → 扇神社周辺域(神武天皇の最初の都): 河川の要衝の地(カササギ川と三笠川の交流点) → 宝満川に宝満宮・竈神社 → 宝満川から有明海への道 → 畝傍山(城山) → 高良山に山幸彦 → 筑後川の上流と有明海の経験が背景にある。

山の神様と海の神様が結ばれた

- 火遠理命と豊玉姫命の結婚 ⇒ 山の神様と海の神様が結ばれたという事を意味する。
- 釣り針を失くした事をいつまでも許そうとしない兄と対立、呪宝(干綬玉・万綬玉)の力により兄との争いに勝利して、地上の世界を統治した。
- 産屋の中は、八尋(やひろ)もある巨大なワニ(古事記及び日本書紀の一書では「鰐」と記され、日本書紀本文では「竜」と記されている)に変身して這い回る妻豊玉姫命がいた。驚いた火遠理命は思わずその場から逃げ出した。

鵜草葺不合命は天上と山と海神の靈力の合体として誕生

- 邇邇芸命は、皇祖神天照大御神の神勅により、天上世界高天原から地上の世界日向国高千穗へ天降り
- 山の神である大山津見神の娘木花咲耶姫を娶って、海幸彦・山幸彦と呼ばれる兄弟の御子をもうける
- 山幸彦火遠理命は、海の神大綿津見神の娘豊玉姬命を娶り、鵜草葺不合命をもうける
- 鵜草葺不合命の御子が初代天皇即位
- 邇邇芸命→火遠理命→鵜草葺不合命の3代の傳承は、「日向三代」と呼ばれるが、この一連の流れは、天皇の祖先が海も山も支配し、名実共に地上世界の統治者となった事を象徴

IV. 竈門神社と玉依姫

- 竈門神社(かまどじんじゃ)福岡県太宰府市宝満山
- 玉依姫はここで我が子神武天皇の東征の成功を祈ったと伝えられます。縁結びの神様として親しまれています。
- 玉依姫命は、宝満山の頂に坐して水分神(みくまりのかみ)となり、この地方一帯の水を支配されたという事です。(海神の神の娘)

此社ハ玉依姫命の山陵

- 農家にある社記に、此社ハ玉依姫命の山陵なり、故に地名をも御陵といふ。古昔御陵の上に神廟を立て崇祭れり。景行天皇神功皇后など此神廟に御祈念の事あり。其後斉明天皇の勅願により天智天皇元年再建し給ひ、同十年奉幣使を下され宝満宮と勅号をまいらせらる。御陵の北なる大嶽塚ハ文武天皇藤原広嗣を勅使として初天智天皇の御奉納の御劔を埋め給ふ表なり。などあり。

神功皇后と玉依姫命

- 新羅を攻める事になった神功皇后はこの玉姫の神廟に来て戦勝を祈りました。
- この時、玉依姫命が現れて「そなたと姉妹の契りを交わしましょう。」と、神功皇后に約束しました。
- それ故に、神宮皇后と玉依姫命と一緒に祀られている神社がある。
- 後の世、心蓮上人(しんれんしょうにん)が宝満山に籠もって修業している時にも玉依姫命が現れたという。

王城神社

王城山から筑後への神武東征

- 福岡県太宰府市に王城(おうぎ)神社がある。祭神は事代主神。末社に早馬神社がある。
- 王城神社縁起(江戸時代寛政年間)によれば、神武天皇が四王寺山に城を築いた際に、山中に武甕槌命と事代主命を祀ったことに由来する。
- 白村江の戦(662年)の後に水城の堤防が築かれた(664年)後の665年に大野城築城に際して、現在の太宰府市通古賀の地に遷されたとされる。

藤原宮御井歌

「やすみしし わご大君 高照らす 日の皇子
あらたへの 藤井が原に 大御門 始め給ひて
埴安の 堤上に あり立たし 見し給へば
大和の 青香具山は 日の経の 大御門に 春山と
しみさび立てり 畝火の この端山は 日の緯の
大御門に 端山と 山さびいます 耳成の 青菅山は
背面の 大御門に よろしなべ 神さび立てり 名くは
しき 吉野の山は 影面の 大御門ゆ 雲居にそ
遠くありける 高知るや 天のみかげ 天知るや
日のみかげの 水こそば 常にあらめ 御井の清水」

図3. 奈良大和三山は誤配置。飛鳥宮は天の香具山の南に位置する。

